

シンガポールにおける大学入試に関する調査

入学センター 杉原敏彦、高地秀明

シンガポールは、東広島市ほどの面積に広島県の2倍の人口を抱える都市国家です。昭和40年(1965年)の分離独立以降目覚ましい経済発展を遂げ、一人当たりのGDPはすでに日本を追い抜いています(世界第8位)。シンガポールは、英語圏であるという強みもあって、東南アジアをはじめ各地から留学生を受け入れているグローバルな教育国家でもあります。

私たちは、最初に一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR)シンガポール事務所を訪ねました(相手方:橋本憲次郎所長他)。訪問の目的は、シンガポールの初等・中等教育から高等教育までの教育制度や教育政策の概要を把握することにあります。シンガポールの教育制度の特徴として、各段階において試験による能力別の振り分けの実施があげられます。まず、初等教育終了時(小学校卒業時)の卒業試験PSLEの結果によって、中等教育コースへの振り分けが行われるのです。シンガポールは人材育成、国民の教育を国家の重要政策に位置づけ、国防費に次ぐ予算を投入し、国家の舵取り役である有能なリーダーと優秀な労働者とを育成する教育システムを構築しています。インタビューを通じて、その実績と課題とを探ることができました。

次に訪れたのは、1981年創立のISSインターナショナルスクールです(相手方:津村美穂教諭)。シンガポールで初めて国際バカロレア(IB)の認定を受けた同校は、現在K1(幼稚園年中)からG12(高校最終学年)まで一貫してIBカリキュラムを提供し、駐在日本人にも高い人気を誇るインターナショナルスクールです。生徒たちの国籍は50か国以上に上り、全校生徒数は約700人で、このうち高等部生徒は約280人です。日本人は約10%。日本人生徒の進路は、帰国し日本の大学に進学する者、シンガポールや欧米の大学を目指す者など多様です。今年から広島大学が国際バカロレア入試(IB入試)を始めたことをお伝えすると、大変関心を持っていただき、今後も継続して学生募集広報に来校するよう望まれました。

最後に、南洋工科大学(Nanyang Technological University)のアドミッション・センター(AC)を訪ねました(相手方:Alan Phuaセンター長他)。南洋工科大学は工学、科学、ビジネススクール、人文社会学、医学他の6学部と大学院課程があり、学部学生24,300人、大学院生8,100人の総合大学です。学士課程の志願者はシンガポール国内が25,500人(79%)であり、出願資格としてはGCE-Aレベル修得者などです。国外からの志願者は6,400人(20%)であり、国別ではマレーシア、インドネシア、ベトナム、インド、中国が多いようです。国際バカロレア(IB)資格による志願者は500人(1%)です。各学部(School)が志願者のうち何人合格させるかは、ACと学部が話し合いをもって決める。AC及び各学部は過去の経験から、たとえば、マレーシアからの志願者のレベルはよくわかっているようです。今まで受け入れ実績のない国や資格(試験)については、当該資格のカリキュラム

についても調べることにしています。それぞれの学部にアドミッション・オフィサーがいて、ACと協働しながら調査、試験等を実施しています。また、広報には相当力を入れているようです。最近のライバル校は香港の大学とのこと。海外での広報として、展示会、教育フェア、説明会、学校訪問などをエネルギーギッシュに実施している様子が見て取れました。

こうしたシンガポールでの調査を通じて、本学の留学生確保の方策（入試制度設計）や広報の在り方に関して、大変役立つ情報を得ることができました。

（訪問日：平成 28 年 12 月 11 日～平成 28 年 12 月 13 日）



CLAIR シンガポール事務所でのインタビュー



南洋工科大学でのインタビュー